本実践・研究から見えてくること

研究協力者　堀江さおり
（秋田大学大学院教育学研究科）

1　本実践がめざすもの

本実践は「よりよい生活を創り出すために，学んだ生活の知識と技能を自ら実践しようとする子どもを育む学び」を研究テーマに，自ら学んだことを実際に活用し，家庭での実践に取り組みやすくすることを目指して進められていた。

食生活分野でみそ汁づくりを取り扱う場合，具材に工夫を凝らすことで栄養バランスを考えさせるといった栄養学習の応用として位置づけられることが多い。しかしながら，本実践では，料理経験がほとんどない子どもたちに食材の特徴を確認し，適切な調理方法を考えさせることを通し，教わるという受け身の姿勢ではなく，「家庭科の見方・考え方」を働かせながらチャレンジして学ぶ姿勢をうながそうとしていた。

2　本実践から見えてきたもの

じゃがいもは子どもたちに人気のあるみそ汁の具材である。本実践はじゃがいもをゆでるという単純な活動ではあるが，前時までの学習内容―使用する鍋選び，じゃがいもの切り方，水加減，ゆで時間，など―を各グループで再度確認させながら作業を進めさせ，指導者があえてきめ細やかな支援しないことにより，グループ内で対話をしながら，他グループの様子を観察しながら，より良いゆで方を模索させるといった工夫が凝らされていた。子どもたちにとっても，自分も考えてやればなんとかできるという体験をすることにより，次の展開への期待を高める実践となっていた。

また，前時の予想段階で提案していた切り方が実際にはできなかったり，水加減が多すぎてなかなかゆで上がらなかったり，食感が想像とは違っていたりといった経験をする中で，「切り方の練習が必要だね。」，「みそ汁をつくるときにはもっと小さく切ろうね。」，「ほくほく感が欲しいからゆで時間を変えた方がいいね。」などといったおいしさを追求するための工夫を語る対話が多く見られた。経験から学ぶとことの大切さが垣間見える実践であった。「家族のために，家族に代わり，ご飯やみそ汁の調理ができるようになる」という具体的な学習後の姿を示すことにより，全体を通して子どもたち自身が学ぶべきことを意識しながら作業を進めることができていたため，おいしいみそ汁をつくりたいという意欲を持続することができたといえるだろう。

3　今後の展望

実習を取り入れた指導では，あえて活動を止めて対話の場を設けるのではなく，活動の自然な流れの中で対話をさせながら相互に学ばせるということが重要である。子どもたち自身がその対話内容をメモに取り，生かすということにはやや困難を伴うので，指導者が机間指導をしながら，子どもたちの対話のポイントを拾い上げ，必要なことを全体で共有していく手立てを考えることで，学びを深める工夫が必要であろう。

日常生活は予定調和的に進むことばかりではないため，あえて指導者によるお膳立ての少ない挑戦的な実践を行うことは，子どもたちのまだ見ぬ可能性を開花させるためにも必要ではないだろうか。今後は他分野での実践にも期待したい。